

# 「個」と「関係性」からみた青年後期・成人期の アイデンティティに関する研究Ⅰ

—「関係性」の次元に着目して—

宗田 直子・岡本 祐子

(2008年10月2日受理)

Identity during Adolescence and Adulthood from the Viewpoints  
of Individuality-based Identity and Relatedness-based Identity

Naoko Sota and Yuko Okamoto

**Abstract:** Identity during adolescence and adulthood was investigated from the viewpoint of individuality-based identity and relatedness-based identity, especially the dimensions of “relatedness.” Individuality Based Identity Scale (IBIS) and Relatedness Based Identity Scale (RBIS) were administered to adolescent (n=198) and adult (n=321) participants. Analysis of the responses to the scales indicated the following. (1) RBIS subscale score; “relatedness before ego formation” was similar between adolescence and adulthood, moreover, this score generally had a positive relationship with IBIS scores of adolescence and adulthood. (2) RBIS subscale scores; “idealization and identification” and “mutuality” had a positive relationship with IBIS scores in adolescence compared to adulthood. (3) RBIS subscale score; “caring for a family, a spouse, and a child” was little related to IBIS scores in adolescence and adulthood. Results suggest that identity during adolescence and adulthood differed according to the dimensions of “relatedness.”

Key words: individuality-based identity, relatedness-based identity, dimensions of relatedness, adolescence, adulthood

キーワード：個としてのアイデンティティ、関係性にもとづくアイデンティティ、関係性の次元、青年期、成人期

## 問題と目的

### 1. 「個」と「関係性」からみたアイデンティティ

「個」と「関係性」からみたアイデンティティ研究が展開されている (Franz & White, 1985; Josselson, 1992, 1994; 岡本, 1997, 2002, 2007; 宗田・岡本, 2005, 2006a, 2007a; 杉村, 1998, 2001, 2005; 山田・岡本, 2008)。アイデンティティの生涯発達をとらえるとき、「個」としての発達軸と「関係性」にもとづく発達の軸がある。岡本 (1997) は、成人期のアイデンティティをとらえる2つの軸として、「個として

のアイデンティティ」と「関係性にもとづくアイデンティティ」を示し、両者のバランスのとれた統合が重要であると述べている。「個としてのアイデンティティ」は、「自分は何者であるか」、「自分は何になるのか」という個の自立・確立が中心的テーマであり、積極的な自己実現の達成へ向けて方向づけられる。一方、「関係性にもとづくアイデンティティ」は、「自分は何のために存在するのか」、「自分は他者の役にたつのか」という中心的テーマをもち、他者の成長や自己実現への援助へ向けて方向づけられる。そして、両者の特質として、山本 (1989) の Separated-self,

Connected-selfの特質が適用されている。

岡本(1997)によると、「個としてのアイデンティティ」と「関係性にもとづくアイデンティティ」は、相互に影響を及ぼし合い、深い関連を持っている。たとえば、他者の成長や自己実現ができるためには、「個としてのアイデンティティ」が達成されていることが前提である。一方、「関係性にもとづくアイデンティティ」を達成することにより、生活や人生のさまざまな局面に対応できる力、危機対応力、自我の柔軟性・しなやかさが獲得される(岡本, 1997)。

また最近では「関係性にもとづくアイデンティティ」の次元を整理する必要性が論じられている。つまり、「関係性にもとづくアイデンティティ」の発達の基盤には、乳幼児期からのさまざまな対人関係があり、各発達段階に応じた「関係性」の次元—あるいは質—が認められる(岡本, 2007)。

昨今、「個」と「関係性」の位置づけについてアイデンティティ研究者間による見解の相違が認められてきた。すなわち、「関係性」が「個」の基盤となるのか、それとも「個」と「関係性」は2軸として発達していくのかに関する見解の相違である。しかしながら、現在のアイデンティティ研究においては、発達段階とそこにおける「関係性」の次元の相違の観点からアイデンティティをとらえるあり方が主流となりつつある。宗田・岡本(2006a)は、青年期のアイデンティティにおいては、「個」を形成するための「関係性」の次元が特徴的であり、一方、アイデンティティがいったん獲得された成人期以降においては「個」を発揮して他者を援助する「関係性」、すなわち、高次の次元の「関係性」が見られ、「個」と並行して発達するあり方が見られることを述べた。さらに、両時期のアイデンティティの基盤には、発達早期に形成された個体的な「関係性」の次元が共通して見られると考えられる(宗田・岡本, 2006c)。このように、アイデンティティが発達課題となる青年期のみでなく、成人期をも対象として検討すること、および、アイデンティティ生涯発達を「個」と「関係性」の様々な次元から包括的にとらえることが必要である。

さて、「関係性」の次元をとらえるとき、「個体内関係性」と「社会的関係性」という視点が有益である(岡本, 2007)。「個体内関係性」は、自我や自己感が形成される以前、誕生直後から存在する。乳児が生後初めて会おう他者は母親(的人物)であり、抱きかかえられることを通して乳児は世界に対する基本的信頼感を形成する。つまり乳幼児は、母親・父親をはじめとする重要な他者との関係の中に育まれて自我を形成していく。「個体内関係性」は、「誕生直後から母親を

はじめ重要な他者との相互のかかわりの中で形成されていく『内在化された他者像』(岡本, 2007)」である。

一方、幼児期以降、「個体内関係性」を基盤として発達する具体的な他者との関係性は「社会的関係性(岡本, 2007)」にとらえられる。「社会的関係性」は実際の他者との関係であり、その基盤にある「個体内関係性」は絶えず修正されつづける。幼児後期以降、Eriksonが述べるように各発達段階には重要な他者が存在し、その他者との「社会的関係性」には様々なものがある。

特に高次の「関係性」であるケアは、「個」がどのように発達するかにより、その質が決まると考えられる。すなわち、青年期におけるケアは、青年自らのアイデンティティを補完するための「関係性」といえる。一方、アイデンティティがいったん獲得された成人期においては、ケアは他者の自己実現の援助として発揮される(岡本, 1997)。ここに、「個」と「関係性」からみた青年期から成人期にかけてのアイデンティティの相違が推察される。

宗田・岡本(2007a)は「関係性」の次元を整理し、アイデンティティを包括的にとらえるために、Josselson(1992, 1994)と岡本(1997)の定義をもとに、「個としてのアイデンティティ」尺度(以下、「個」尺度)と「関係性にもとづくアイデンティティ」尺度(以下、「関係性」尺度)を作成した。「個」尺度は青年期のみならず成人期を対象として標準化された。「関係性」尺度は7次元の「関係性」の因子が抽出された。すなわち、「個体内関係性」として、「基本的他者信頼」、「熱情的体験・目と目の確認」下位尺度、「社会的関係性」として、「理想化と同一化」、「相互性・相互調整」、「埋め込み」、「友人への思いやり」、「配偶者・子ども・家庭への配慮」下位尺度が作成された。

## 2. 目的と仮説

本研究では上記の尺度を用いて、青年後期から成人期にかけてのアイデンティティ発達を、「個」と「関係性」の観点から数量的に検討することを目的とする。特に先述した、青年後期と成人期における「関係性」の次元の現れ方の相違を検討することを目的とする。

本研究の仮説は大きく次の2点である。

①「個体内関係性」は、成長した後、心の中に「内在化された他者像」として生き続けるものであり、青年後期と成人期ともに重要である(岡本, 2007)。そして、心の中の「内在化された他者像」は、後の発達過程において、「重要な他者」とのかかわりの中で修正され続けていく(岡本, 2007)。このように、アイデンティティの基盤である「個体内関係性」は、本研究における青年後期・成人期の尺度得点としての現れ

方に、発達的变化は見られないと推測する。また、「個体内関係性」は青年後期・成人期ともに「個」の基盤となるため、「個体内関係性」と「個」との間には正の相関がみられることが予測される。

②「社会的関係性」は、青年後期と成人期において相違があると思われる。まず、高次の「関係性」であるケアは成人期に優位に見られると推測する。次に、「理想化と同一化」というアイデンティティ形成のための「関係性」は青年後期に優位に見られると推測する。また、これは、アイデンティティがいったん形成された成人期よりも青年後期の方が「個」との間に高い正の相関を持つことが予測される。

青年後期と成人期のあいだをどう区別するかに関して、本研究では次のように考える。アイデンティティ達成のひとつの契機として、職業に就くことが挙げられる。そこで、10代と大学生は青年後期、20代でも職業が定職でない方は青年後期ととらえ、20代で就職している方（アルバイトを除く）を成人期ととらえる。また、成人期の課題の親密性達成のひとつのあらわれとして結婚が挙げられると考え、20代の既婚の方は成人期であるととらえる。

## 方 法

### 1. 調査票

「個」尺度38項目、「関係性」尺度43項目、計81項目（宗田・岡本, 2007a）。尺度項目は Table 1 に示した。「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの7件法で回答を求めた。フェイス項目は、性別、年齢、未婚・既婚、子どもの有無、職業であった。

### 2. 調査手続き

大学生を対象とした調査では、異なる都道府県の国立 A、私立 B 大学において講義中に配布し、集団的に実施した。一部の対象者は知人を通じて配布し、郵送により回収した。成人の対象者は、知人を通じて全国的に配布もしくは郵送で依頼し、郵送により回収した。また、成人対象の講演会に依頼し、受講者に回答を求め、後日回収した。

### 3. 調査対象者

521名（男性204名、女性317名）、平均年齢（SD）は37.56歳（SD 16.75）、男性36.46歳（SD 17.81）、女性38.27歳（SD 16.01）であった。このうち、目的で述べた操作的定義をもとに分類した結果、青年後期は198名（男性95名、女性103名）、平均年齢（SD）は20.39歳（SD 1.59）、男性20.33歳（SD 1.50）、女性20.45歳（SD 1.67）であった。成人期は321名（男性109名、女性212名）、平均年齢（SD）は48.25歳（SD 12.49）、

男性50.52歳（SD 12.88）、女性47.08歳（SD 12.14）であった。2名は不明であった。

### 4. 調査時期

2006年1月から9月であった。

## 結果と考察

### 1. 「個」と「関係性」からみたアイデンティティの横断的検討—青年後期と成人期における尺度得点の差の検定—

青年後期と成人期における「個」尺度と「関係性」尺度得点の平均値を算出し、*t*検定を行った（Table 2）。

その結果、「個」尺度においては、「積極的自己実現」、「自己と他者の不可侵性」、「対自的同一性」の下位尺度と「個」尺度全体得点において、成人期の得点が青年後期より有意に高かった。「個」が青年後期から成人期にかけて発達することが実証的に示された。「個体化の発達」、「自己斉一性・連続性」、「自己主張」の下位尺度において、青年後期と成人期に有意な差は見られなかった。これは、本研究の対象者が主に大学生であったため、「個」におけるこれらの側面が、すでに発達している側面であった可能性がある。しかしながら、青年後期から成人期にかけて発達する「個」の側面と発達しない「個」の側面があることをも示唆しており、今後の検討の余地が残された。

「関係性」においては、「個体内関係性」（「基本的他者信頼」、「情熱的体験・目と目の確認」）が青年後期・成人期ともに有意差は見られなかった。「個体内関係性」が発達段階を通して発達の変化を示すものではないことが示唆され、仮説は支持された。

「理想化と同一化」、「相互性・相互調整」は青年後期の方が成人期より有意に得点が高かった。これらの「関係性」が成人期よりも青年後期におけるアイデンティティ形成に優位に見られることが明らかとなり、仮説は支持された。

「配偶者・子ども・家庭への配慮」に関しては、成人期の方が青年後期よりも有意に得点が高く、仮説は支持された。

「埋め込み」に関しては、青年後期・成人期において差は見られなかった。「埋め込み」は、環境、集団という他者に埋め込まれることや所属感であり、これは、青年後期・成人期ともに重要な課題であると考えられる。

一方、「友人への思いやり」得点に有意差は見られなかった。宗田・岡本（2007b）によると、「友人への思いやり」は成人期の「関係性」の因子構造には反映されなかった。しかし、本研究の結果は、友人とい

Table 1 「個」尺度と「関係性」尺度の項目

「個」尺度 (6 下位尺度)	「関係性」尺度 (7 下位尺度)
<b>積極的自己実現 (11 項目)</b>	<b>「個体内関係性」尺度 (2 下位尺度)</b>
私は、人生の中で達成したいことに、だんだん近づいてい	<b>基本的他者信頼 (4 項目)</b>
ている気がする。	世界は、私をつき落とすようなことはないだろうと思う。
私は、人生の目標を達成するために努力できていると思う。	私は、世界から十分に守られているという感じがする。
私は積極的に自分の夢を叶えていっているだろう。	私は、周りの人に対して違和感はなく、調和していると思う。
人生を通して成し遂げたいことがあり、そのために何らかの	私は、十分に世界が安全だと感じている。
行動をとっている。	<b>熱情的体験・目と目の確認 (10 項目)</b>
自己実現の見通しがそろそろ立ってきたと感じている。	私は他者の目の中に、自分自身の価値を見出すことができる。
自分のすべきことがはっきりしている。	目と目のコンタクトを通して、私は他者に対する自分の意味を見
自分が望んでいることがはっきりしている。	つけることができる。
自分がどうなりたいたいのかがはっきりしている。	目と目のコンタクトを通して、私は自分自身について信じられる
私は、積極的に自己実現をしていると思う。	ようになる。
私は日々、自分のやりたいことを実現していると感じている。	私は、他者の目の中に自分自身を映し出す。
私は、自分のやりたいことを積極的にこなしていっていると思う。	人から見られることで、私は、自分がどのようなものであるのか
<b>自己と他者の不可侵性 (8 項目)</b>	を確認できる。
他者が自分の考えを何と思おうと気にしない。	他者に対する恋のような熱情が、私の新しい世界と経験をつくっ
人にどう思われるかということあまり気にならない。	ていると思う。
考えや行動が他人と違ってても気にならない。	私は、他者にとって重要な存在であることが、他者の目を見るこ
他人と意見が異なっても、そんなに気にすることはない。	とによってわかる。
他人と自分の行動が違うと、ひどく気になる。R	誰かとの間で情熱的な体験をすることにより、私は自分の新しい
人から非難されると非常にこたえる。R	思考や目的に気づいていると思う。
自分が満足していれば人が何を言おうと気にならない。	私は、他者との結びつきを通して快感を得ている。
日常のささいな出来事や人間関係に、あまり心をわずらわ	肉体的にも、精神的にも、私は誰かに抱きかかえられることを望
れることはない。	んでいる。
<b>個体化の発達 (6 項目)</b>	<b>「社会的関係性」下位尺度 (5 下位尺度)</b>
これからも自分は自分であると思う。	<b>理想化と同一化 (4 項目)</b>
これから先も自分は自分であるだろうと強く感じている。	私には、理想とする人やヒーローがいる。
私は、これから先も私であると確信している。	私は、自分がどのようになるかについて、モデルとする人がいる。
どんなときでも「自分は自分である」と感じている。	自分の生き方を決めるきっかけとなった人がいる。
私は、どんなときでも「私」であるだろう。	私は、今そこにいる「その人」に対して、愛着を感じている。
他人は他人、自分は自分だと思う。	<b>相互性・相互調整 (5 項目)</b>
<b>自己斉一性・連続性 (4 項目) (谷, 2001 から引用)</b>	自分と異なる意見を持つ人とは、あまり話をしたくない。R
過去に自分自身を置き去りにしてきたような気がする。R	自分と違う意見をもつ人の話は、聞きたくない。R
過去において自分をなくしてしまったように感じる。R	誰かと意見が食い違っても、それ以上は話す気になれない。R
今のままでは次第に自分を失っていつてしまうような気がする。R	相手と意見が合わなくても、わざわざ話し合っ解決しよう
いつのまにか自分が自分でなくなってしまったような気がする。R	とは思わない。R
<b>自己主張 (5 項目)</b>	私は自分と異なる意見にも積極的に耳を傾けようとする。
自分の権利ははっきりと主張する。	<b>理め込み (6 項目)</b>
自分の意見をいつもはっきり言う。	「ここが私の所属する場所だ」と、日常生活の中で日々感じている
その場の雰囲気や人の気持ちにかかわらず、言いたいことは言う。	所がある。
いつも自信をもって発言し、行動している。	自分の周りには、自分を支えてくれる腕があるという感じがする。
周りと反対でも、自分が正しいと思うことは主張できる。	私は、誰かと互いに情熱的な結びつきを感じている。
<b>対自的同一性 (4 項目)</b>	私は、ある特定の集団の中に、自分の存在する場所をみつけた。
自分が何をしたいのかわからなく感じる時がある。R	私は、一人ぼっちである。R
自分が何を望んでいるのかわからなくなることがある。R	他者の冷たい目を見て、誰も私を必要としないと思う。R
「自分がない」と感じる時がある。R	<b>友人への思いやり (8 項目)</b>
「自分がない」と感じるようなことはほとんどない。	友人が困っていたら、いつも親身になって解決策を考える。
	友人が何かに困っていても、自分から進んで手伝おうとは思
	わない。R
	友人が何かをやりがたっていたら、それができるようにいつ
	も協力している。
	私はちょっとしたことで、友人に世話をしあげることが楽しい。
	私はいつも友人のことを思いやっていたい。
	友人の相談にのることが面倒だと思うことがある。R
	友人の希望よりも、自分の希望の方を優先させている。R
	友人の悩み事や相談事をきくことは、私の大事な使命だと思う。
	<b>配偶者・子ども・家庭への配慮 (6 項目)</b>
	結婚して配偶者や子どもの世話をするよりも、自分のことだけ
	を考えて生きていきたいという気持ちの方が強い。R
	子育てに追われるより、自分のやりたいことや趣味を優先させ
	ていきたいと思う。R
	よき配偶者を得て結婚することが、私の最大の関心事である(あった)。
	職業・キャリアよりも、あたたかい家庭を築きたいと思う。
	私は子育てにあまり関心を持っていない。R
	結婚し、家庭を築くことは、私にとって大きな課題だ(だった)。

注) 逆転項目は、項目末に R と記載した。  
 尺度作成については宗田・岡本 (2007a) を参照されたい。  
 尺度項目は、筆者が定義より作成したほか、高井 (1999)、高田 (1999)、谷 (2001)、山本 (1989) の文献より引用した項目を含む。

Table 2 青年後期と成人期の尺度得点の *t* 検定の結果 (N=519)

	青年 (N=198)		成人 (N=321)		<i>t</i> 値
	平均	SD	平均	SD	
「個」尺度					
積極的自己実現	47.70	11.20	49.74	11.15	-2.03*
自己と他者の不可侵性	29.54	7.75	31.31	8.48	-2.38*
個体化の発達	29.99	5.84	30.73	5.53	-1.44
自己斉一性・連続性	19.55	4.89	19.82	4.72	-.62
自己主張	20.84	4.82	20.22	4.78	1.44
対自的同一性	16.15	5.00	18.47	5.03	-5.13***
「関係性」尺度					
基本的他者信頼	15.23	3.71	15.59	3.70	-1.07
熱情的体験・目と目の確認	41.54	8.56	40.58	8.50	1.25
理想化と同一化	18.42	4.90	17.34	4.53	2.57*
相互性・相互調整	24.99	5.16	23.28	4.87	3.80***
埋め込み	29.42	6.26	29.52	5.41	-.18
友人への思いやり	38.20	6.37	38.26	6.11	-.11
配偶者・子ども・家庭への配慮	29.25	6.78	30.51	5.68	-2.19*
「個」尺度合計得点	163.77	28.94	170.29	30.40	-2.42*
「関係性」尺度合計得点	197.05	28.14	195.08	24.55	.84
全尺度合計得点	360.82	47.59	365.37	43.30	-1.12

\**p*<.05, \*\**p*<.01, \*\*\**p*<.001

う他者が青年後期と同様、成人期においても意味を持つものであることを示唆している。仕事や家庭の忙しさの中で友人との実際のなかかわりが減っていても、内在化された友人イメージに支えられ、また友人への思いやり感情につながっていると推測される。成人期のアイデンティティ再体制化にかかわる他者として、実際の友人関係がどのようにかかわっているのかに関して、また、過去の友人関係による体験がどのようにアイデンティティを支えているのかに関して、今後、質的手法を用いて詳細に検討する必要がある。

## 2. 青年後期・成人期における「個」と「関係性」の関連に関する比較検討

青年後期・成人期における「個」と「関係性」の関連を検討するために、「個」尺度得点と「関係性」尺度得点の2変数間について、ピアソンの積率相関係数 (Pearson's product-moment correlation coefficient; *r*) を算出した。青年後期の下位尺度間相関および全体尺度間相関の分析結果を Table 3-1, 3-2に示した。成人期の下位尺度間相関および全体尺度間相関の Table 4-1, Table 4-2に示した。なお、青年後期と成人期の尺度得点平均値は Table 2を参照されたい。

青年後期と成人期を比較すると、「個」尺度と「関係性」尺度の相関係数は、青年後期が *r* = .39、成人期が *r* = .23であった。この結果は、成人期より青年後期の方が「個」と「関係性」が密接にかかわっていることを示唆している。青年後期より成人期の方が「個」と「関係性」を2つの軸としているという推察も可能である。ただ、この結果は、「個」と「関係性」の様々な次元を含めたものであるため、次に、下位尺度を用いて詳細に検討する。

まず、「個体内関係性」下位尺度（「基本的他者信頼」、「熱情的体験・目と目の確認」と「個」下位尺度の相関係数を比較検討する。「個体内関係性」の「基本的他者信頼」下位尺度と「個」下位尺度の相関分析の結果、「積極的自己実現」(青年後期 *r* = .34; 成人期 *r* = .36), 「自己と他者の不可侵性」(青年後期 *r* = .09; 成人期 *r* = .22), 「個体化の発達」(青年後期 *r* = .28; 成人期 *r* = .23), 「自己斉一性・連続性」(青年後期 *r* = .35; 成人期 *r* = .33), 「自己主張」(青年後期 *r* = .10; 成人期 *r* = .26), 「対自的同一性」(青年後期 *r* = .28; 成人期 *r* = .25)と相関を持った。「熱情的体験・目と目の確認」と「個体化の発達」は、青年後期は相関を持ったが (*r* = .24), 成人期においては相関を持たなかった (*r* = .01)。また、「熱情的体験・目と目の確認」と「自己主張」(青年後期 *r* = .16; 成人期 *r* = .10), 「対自的同一性」(青年後期 *r* = .15; 成人期 *r* = -.08)においても、青年後期に弱い正の相関があった一方で、成人後期には相関が見られなかった。

以上の結果から、「個体内関係性」と「個」の相関に関して、「基本的他者信頼」と「個」の関連の仮説はほぼ支持された。「熱情的体験・目と目の確認」と「個」の関連に関しては、青年後期においては仮説が支持されたが、成人期においては支持されなかった。成人期において、「熱情的体験・目と目の確認」と「個」の関連が見られなかったことは、「個」を支える「個体内関係性」の発達段階による相違かもしれない。「熱情的体験・目と目の確認」は、他者へ「同一化」すること、すなわち、青年期にアイデンティティを形成するとき特徴的な「関係性」の前段階ともいえる「個体内関係性」である。したがって、アイデンティティ

Table 3-1 青年後期の「個」と「関係性」下位尺度間相関分析結果 (N=198)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
1. 積極的自己実現	-	.30***	.49***	.39***	.51***	.50***	.34***	.29***	.45***	.28***	.48***	.31***	.25***
2. 自己と他者の不可侵性		-	.38***	.33***	.51***	.44***	.09	-.08	-.01	.04	.07	-.10	-.06
3. 個体化の発達			-	.53***	.44***	.53***	.28***	.24***	.24***	.22**	.32***	.18*	.08
4. 自己斉一性・連続性				-	.23**	.51***	.35***	.11	.12	.24***	.42***	.14*	.11
5. 自己主張					-	.48***	.10	.16*	.18*	.17*	.30***	.19**	.18*
6. 対自的同一性						-	.28***	.15*	.18*	.14*	.31***	.17*	.04
7. 基本的他者信頼							-	.38***	.34***	.12	.39***	.17*	.14
8. 情熱的体験・目と目の確認								-	.45***	.14	.44***	.43***	.35***
9. 理想化と同一化									-	.21**	.45***	.30***	.25***
10. 相互性・相互調整										-	.37***	.47***	.37***
11. 埋め込み											-	.52***	.45***
12. 友人への思いやり												-	.42***
13. 配偶者・子ども・家庭への配慮													-

\*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

Table 3-2 青年後期の「個」と「関係性」全体尺度間相関分析結果 (N=198)

	14	15	16	17	18
1. 積極的自己実現	.80***	.50***	.35***	.49***	.78***
2. 自己と他者の不可侵性	.68***	-.03	-.03	-.02	.40***
3. 個体化の発達	.74***	.32***	.29***	.28***	.64***
4. 自己斉一性・連続性	.64***	.29***	.21**	.29***	.56***
5. 自己主張	.71***	.28***	.16*	.29***	.59***
6. 対自的同一性	.76***	.26***	.22**	.23**	.61***
7. 基本的他者信頼	.34***	.49***	.66***	.32***	.49***
8. 情熱的体験・目と目の確認	.21**	.74***	.95***	.51***	.56***
9. 理想化と同一化	.30***	.62***	.49***	.59***	.55***
10. 相互性・相互調整	.25***	.55***	.15*	.66***	.48***
11. 埋め込み	.44***	.78***	.49***	.79***	.73***
12. 友人への思いやり	.22**	.74***	.41***	.77***	.57***
13. 配偶者・子ども・家庭への配慮	.15*	.67***	.33***	.73***	.49***
14. 「個」尺度合計得点	—	.39***	.29***	.38***	.84***
15. 「関係性」尺度合計得点		—	.77***	.95***	.83***
16. 「個体内関係性」下位尺度得点			—	.53***	.63***
17. 「社会的関係性」下位尺度得点				—	.79***
18. 全項目合計得点					—

\*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

Table 4-1 成人期の「個」と「関係性」下位尺度間相関分析結果 (N=321)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
1. 積極的自己実現	-	.40***	.50***	.49***	.54***	.61***	.36***	.18***	.33***	.14**	.42***	.18**	.04
2. 自己と他者の不可侵性		-	.51***	.31***	.57***	.44***	.22***	-.11	-.05	.10	.12*	-.13*	-.14*
3. 個体化の発達			-	.54***	.55***	.53***	.23***	.01	.00	.21***	.28***	.05	.04
4. 自己斉一性・連続性				-	.34***	.67***	.33***	-.07	.04	.32***	.37***	.13*	.07
5. 自己主張					-	.44***	.26***	.10	-.02	.18***	.20***	.16**	-.08
6. 対自的同一性						-	.25***	-.08	.05	.16**	.32***	.03	.01
7. 基本的他者信頼							-	.32***	.17**	.17**	.44***	.18**	.10
8. 情熱的体験・目と目の確認								-	.44***	.10	.41***	.37***	.22***
9. 理想化と同一化									-	.09	.41***	.37***	.26***
10. 相互性・相互調整										-	.32***	.37***	.18**
11. 埋め込み											-	.44***	.27***
12. 友人への思いやり												-	.30***
13. 配偶者・子ども・家庭への配慮													-

\*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

Table 4-2 成人期の「個」と「関係性」全体尺度間相関分析結果 (N=321)

	14	15	16	17	18
1.積極的自己実現	.83***	.35***	.28***	.33***	.78***
2.自己と他者の不可侵性	.73***	-.03	-.01	-.04	.49***
3.個体化の発達	.77***	.16**	.09	.17**	.63***
4.自己斉一性・連続性	.69***	.23***	.06	.28***	.61***
5.自己主張	.74***	.17**	.18**	.14*	.62***
6.対自的同一性	.78***	.13*	.02	.17**	.62***
7.基本的他者信頼	.37***	.49***	.62***	.31***	.53***
8.情熱的体験・目と目の確認	.03	.73***	.94***	.46***	.44***
9.理想化と同一化	.12*	.62***	.43***	.61***	.44***
10.相互性・相互調整	.22***	.48***	.14**	.58***	.43***
11.埋め込み	.38***	.74***	.50***	.73***	.69***
12.友人への思いやり	.09	.71***	.37***	.77***	.47***
13.配偶者・子ども・家庭への配慮	-.02	.54***	.21**	.62***	.29***
14.「個」尺度合計得点	—	.23***	.16**	.23***	.83***
15.「関係性」尺度合計得点		—	.78***	.93***	.73***
16.「個体内関係性」下位尺度得点			—	.50***	.55***
17.「社会的関係性」下位尺度得点				—	.69***
18.全項目合計得点					—

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

を達成した成人期にとっては、「個」を支える「個体内関係性」とはいえないという推測も捨てきれない。しかし、理論的には、「熱情的体験・目と目の確認」は一生を通じて、「個」を支えていくものである。この結果は、「個体内関係性」を尺度でとらえようとする方法論的問題を示唆しており、今後、投影法や面接調査による検討の余地が残された。

次に、「理想化と同一化」と「個」との関連を検討する。「理想化と同一化」と「積極的自己実現」(青年後期  $r = .45$ ; 成人期  $r = .33$ )、「自己と他者の不可侵性」(青年後期  $r = -.01$ , 成人期  $r = -.05$ )、「個体化の発達」(青年後期  $r = .24$ ; 成人期  $r = .00$ )、「自己斉一性・連続性」(青年後期  $r = .12$ ; 成人期  $r = .04$ )、「自己主張」(青年後期  $r = .18$ ; 成人期  $r = -.02$ )、「対自的同一性」(青年後期  $r = .18$ ; 成人期  $r = .05$ )との間に相関が見られた。以上の結果、「理想化と同一化」と「個」との間の関連は、仮説通り、青年後期の相関の方が成人期の相関よりも高い結果となった。青年は周りの他者をモデルとしてアイデンティティを形成する。特に「積極的自己実現」との関連を高くもったことは、青年がどのような人生を送るかを考える際、他者をモデルとすることを示しており、Erikson (1950 仁科訳 1977)の理論通りの結果であった。

「相互性・相互調整」と「個」との関連を検討する。「相互性・相互調整」と「積極的自己実現」(青年後期  $r = .28$ ; 成人期  $r = .14$ )、「自己と他者の不可侵性」(青年後期  $r = .04$ ; 成人期  $r = .10$ )、「個体化の発達」(青年後期  $r = .22$ ; 成人期  $r = .21$ )、「自己斉一性・連続性」(青年後期  $r = .24$ ; 成人期  $r = .32$ )、「自己主張」(青年

後期  $r = .17$ ; 成人期  $r = .18$ )、「対自的同一性」(青年後期  $r = .14$ ; 成人期  $r = .16$ )との間に相関が見られた。本研究での「相互性・相互調整」は杉村 (1999)の記述に基づき、項目を作成した(宗田・岡本, 2007a)。すなわち、「他者と共有できる考え方、欲求、意見、生き方などに気づき、さらに、それらを自分のもっているものとつぎあわせながら取り込む作業を行う中で、自己と他者の視点を認識し、両者の食い違いを相互調整によって解決すること(杉村, 1999)」という定義に基づいている。これは、青年期のみならず、「アイデンティティ再体制化(岡本, 1985)」の際にも重要な視点であると考えられる。そのため、青年後期も成人期も同様に「個」と相関を持ったと考えられる。しかし、「積極的自己実現」との関連において、青年後期の方が成人期よりも高い正の相関を持った結果は、杉村 (1999)が女子青年を対象とした職業・友情・デート・性役割といった領域に着目していたためであると推察できる。つまり、自分がどのような職業に就くかという積極的な自己実現の方向性は、青年にとって大きな課題であり、先輩や先生など、職業をもつ大人との間での意見の相互調整を行っている様子が推察される。どのような他者との間で具体的にどのように相互調整するのかについては、杉村 (2001, 2005)のように面接手法を用いる必要がある。今後は成人を対象とした面接による検討が求められる。

次に、「配偶者・子ども・家庭への配慮」と「個」との関連を検討する。「配偶者・子ども・家庭への配慮」と「積極的自己実現」(青年後期  $r = .25$ ; 成人期  $r = .04$ )、「自己と他者の不可侵性」(青年後期  $r = -.06$ ;

成人期  $r=-.14$ ), 「個体化の発達」(青年後期  $r=.08$ ; 成人期  $r=.04$ ), 「自己斉一性・連続性」(青年後期  $r=.11$ ; 成人期  $r=.07$ ), 「自己主張」(青年後期  $r=.18$ ; 成人期  $r=-.08$ ), 「対自的同一性」(青年後期  $r=.04$ ; 成人期  $r=.01$ ) との間に相関が見られた。青年後期において「積極的自己実現」, 「自己主張」との間に正の相関がみられた以外は, ほとんど関連がみられなかった。青年にとっては, 自らの生き方を模索する中で, 例えば家庭に入る生き方を自らの自己実現であると考えられるかもしれない。そのため「配偶者・子ども・家庭への配慮」と「積極的自己実現」の間に正の相関がみられたと推察できる。しかし, 「自分が自分である感じ」というアイデンティティの中核的テーマとの関連はみられていない。また, 成人においては, 「配偶者・子ども・家庭への配慮」と「個」との関連がほとんど見られなかった。これらから, 「配偶者・子ども・家庭への配慮」が「個」と関連を持たない別の「関係性」の軸である可能性が示唆された。特に成人期においては, 岡本 (1997) の述べるように, 「個」と「関係性」の2つの軸があることを支持する結果であった。ただ, 本研究では尺度を用いた数量分析であるため, 相関がみられないという結果を得ることしかできなかった。相関がみられないこと=2つの軸であると結論づけることはできない。特に, ケアすることによる「個」の発達が十分に検討されたかに関しては, 方法論的問題の検討の余地が残されており, 今後の課題である。

次に, 「友人への思いやり」と「個」との関連を検討した。「友人への思いやり」と「積極的自己実現」(青年後期  $r=.31$ ; 成人期  $r=.18$ ), 「自己と他者の不可侵性」(青年後期  $r=-.10$ ; 成人期  $r=-.13$ ), 「個体化の発達」(青年後期  $r=.18$ ; 成人期  $r=.05$ ), 「自己斉一性・連続性」(青年後期  $r=.14$ ; 成人期  $r=.13$ ), 「自己主張」(青年後期  $r=.19$ ; 成人期  $r=.16$ ), 「対自的同一性」(青年後期  $r=.17$ ; 成人期  $r=.03$ ) との間に相関が見られた。これらの結果は, 「友人への思いやり」が成人期よりも青年後期の方が「個」の感覚に関連を持っていることが示唆された。青年後期においては, 友人への思いやりによって, 「個」が支えられていると推察できる。これは, 大野 (1999, 2006) の述べる“アイデンティティのための恋愛”とも共通する見解であると考えられる。すなわち, 青年自らのアイデンティティを補うために, “恋人”である他者を“愛”し, 賞賛を求めるのである。大野 (2006) のいう「愛のパケツ理論」は, 青年のパケツに愛が十分溜まって次に溢れた愛を他者へのケアとして発揮するというものである。本研究においても, 青年が友人を思いやることにより“友人を思いやっている自分”や“思いやるこ

とにより友人から求められる自分”としてのアイデンティティを感じていると推察される。

「埋め込み」と「個」との関連を検討したところ, 「積極的自己実現」(青年後期  $r=.48$ ; 成人期  $r=.42$ ), 「自己と他者の不可侵性」(青年後期  $r=.07$ ; 成人期  $r=.12$ ), 「個体化の発達」(青年後期  $r=.32$ ; 成人期  $r=.28$ ), 「自己斉一性・連続性」(青年後期  $r=.42$ ; 成人期  $r=.37$ ), 「自己主張」(青年後期  $r=.30$ ; 成人期  $r=.20$ ), 「対自的同一性」(青年後期  $r=.31$ , 成人期  $r=.32$ ) との間に相関が見られた。これらから, 青年後期・成人期も同様に, 「埋め込み」が「個」の感覚と関連を持っていることが示唆された。「埋め込み」は両時期ともに下位尺度合計得点の有意差もなかった。社会の中に居場所を持つこと, 集団に属することがアイデンティティにとっていかに重要であるかを示す結果であり, Erikson (1950 仁科訳 1977) の理論を支持するものであった。

## 全体的考察と今後の課題

本研究では, 「個」と「関係性」からみた青年後期と成人期のアイデンティティを「関係性」の次元に着目して比較検討した。その結果, 「関係性」の次元により, 両時期の「個」と「関係性」のあり方に相違があることが示唆された。

用いた尺度 (宗田・岡本, 2007a) は「関係性」の次元を包括的にとらえる目的で作成されたものであり, その使用は途についたばかりである。特に, 「個体内関係性」を尺度でとらえることは試作段階である。しかし, 本結果からは, 尺度の有用性が示唆されたと考えられる。「個体内関係性」が各発達段階において同じように見られることが示唆された点は, 岡本 (2007) の理論を量的手法で実証化したという点で評価に値する。

岡本 (2002) は, 発達早期の自我形成が, のちのアイデンティティ形成に及ぼす影響の検討が必要であると述べているが, アイデンティティ研究においてこれに取り組んでいるものはごくわずかである。Kroger (1990) が青年期のアイデンティティ形成と乳幼児期の自我および対象関係の発達の特質との関連について検討しているものの, 早期記憶面接という手法であるため, 対象者の記憶のあるところまでしか取り出せていないのが現状である。この点は本研究においても同様であり, 尺度を用いて「個体内関係性」をとらえる試みは, 尺度項目への回答から「内在化された他者イメージ (岡本, 2007)」をとらえることが難しいという問題点が指摘できる。今後の課題として方法論の改



善の余地が残る。

宗田・岡本 (2006b) はこの点について、投射法検査の一種である主題統覚検査 (Thematic Apperception Test: 以下, TAT) の使用が有用であると論じている。TAT は、対象関係の査定に適した投影法であり、アイデンティティの基盤となる、「内在化された他者イメージ (岡本, 2007)」を測定するうえで有用な方法論である。TAT から推測された「個体内関係性」と、質問紙尺度を用いてとらえた青年期・成人期における「個」と「関係性」からみたアイデンティティとの関連を検討することにより、「個体内関係性」がのちのアイデンティティ発達に及ぼす影響について考察することが可能であると考えられる。

一方、本研究では「個」と「社会的関係性」からみたアイデンティティについて、ほぼ理論通りの結果が得られた。この点も本尺度の有用性であると考えられる。しかし、尺度項目に対する回答は、各時期および各対象者によって、さまざまな意味を有していると考えられる。したがって今後は、尺度項目のとらえ方が青年と成人でどのような意味を有しているのかに関して、質的手法を交えて検討することが課題である。

## 【引用文献】

- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and Society*. New York: Norton.
- (エリクソン, E. H. 仁科弥生 (訳) (1977). 幼児期と社会 みすず書房)
- Franz, C. E. & White, K. M. (1985). Individuation and attachment in personality development: Extending Erikson's theory. *Journal of Personality*, 53, 224-256.
- Josselson, R. (1992). *The space between us: Exploring the dimensions of human relationships*. San Francisco: Jossey-bass.
- Josselson, R. (1994). Identity and Relatedness in Life Cycle. In H. A. Bosma (Ed.), *Identity and development: An Interdisciplinary approach*. Thousand Oaks: Sage. pp.81-102.
- Kroger, J. (1990). Ego structuralization in late adolescence as seen through early memories and ego identity status. *Journal of Adolescence*, 13, 65-77.
- 岡本祐子 (1985). 中年期の自我同一性に関する研究 教育心理学研究, 33, 295-306.
- 岡本祐子 (1997). 中年からのアイデンティティ発達の心理学 ナカニシヤ出版

- 岡本祐子 (編著) (2002). アイデンティティ生涯発達論の射程 ミネルヴァ書房
- 岡本祐子 (2007). アイデンティティ生涯発達論の展開——中年期の危機と心の深化—— ミネルヴァ書房
- 大野 久 (1999). 人を恋するという事 佐藤有耕 (編著) 高校生の心理①広がる世界 大日本図書 pp.70-95.
- 大野 久 (2006). アイデンティティ概念再考: 個と関係性の観点から——宗田・岡本論文へのコメント—— 青年心理学研究, 18, 97-102.
- 宗田直子・岡本祐子 (2005). アイデンティティの発達をとらえる際の「個」と「関係性」の概念の検討——「個」尺度と「関係性」尺度作成の試み—— 青年心理学研究, 17, 27-42.
- 宗田直子・岡本祐子 (2006a). 「個」と「関係性」からアイデンティティをとらえる試み再々考——大野・高村コメントへのリプライ—— 青年心理学研究, 18, 103-108.
- 宗田直子・岡本祐子 (2006b). 「個」と「関係性」からアイデンティティをとらえる方法論に関する検討——TAT (Thematic Apperception Test) を導入する試み—— 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 5, 68-83.
- 宗田直子・岡本祐子 (2006c). 「個」と「関係性」からみたアイデンティティ研究の動向と展望——発達早期における「個」と「関係性」の起源に着目して—— 広島大学心理学研究, 6, 223-242.
- 宗田直子・岡本祐子 (2007a). 「個としてのアイデンティティ」と「関係性にもとづくアイデンティティ」尺度の作成 日本青年心理学会第15回大会発表論文集, 56-57.
- 宗田直子・岡本祐子 (2007b). 「関係性にもとづくアイデンティティ」の構造に関する青年後期と成人期の相違 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 6, 75-89.
- 杉村和美 (1998). 青年期におけるアイデンティティの形成——関係性の観点からのとらえ直し—— 発達心理学研究, 9, 45-55.
- 杉村和美 (1999). 現代女性の青年期から中年期までのアイデンティティ発達 岡本祐子 (編著) 女性の生涯発達とアイデンティティ 北大路書房 pp.55-86.
- 杉村和美 (2001). 関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ探求——2年間の変化とその要因—— 発達心理学研究, 12, 87-98.
- 杉村和美 (2005). 女子青年のアイデンティティ探求——関係性の観点から見た2年間の縦断研究—— 風間書房

- 高井範子 (1999). 対人関係性の視点による生き方態度の発達の研究 教育心理学研究, 47, 317-327.
- 高田利武 (1999). 日本文化における相互独立性・相互協調性の発達過程——比較文化的・横断的資料による実証的検討—— 教育心理学研究, 47, 480-489.
- 谷 冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造——多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成—— 教育心理学研究, 49, 265-273.
- 山田みき・岡本祐子 (2008). 「個」と「関係性」からみた青年期におけるアイデンティティ——対人関係の特徴の分析—— 発達心理学研究, 19, 108-120.
- 山本里花 (1989). 「自己」の二面性に関する一研究——青年期から成人期にかけての発達傾向と性差の検討—— 教育心理学研究, 37, 302-311.